精神性と教育におけるその意義

ステファン・ホール

（要　旨）

はじめに

「精神性と教育におけるその意義」という題が示唆しているように、精神性は人間の本質と教育の内容及び方法とに重要な関係がある。この関係を考察するにあたって、以下の点に沿って、話を進めたいと思う。

- 人間の精神的な性質は何であるか？
- その精神的な性質を明らかにすることにより、教育内容と方法はどのように変わるのか？

先ず、ウィリアム・バーンズ氏の開会の辞とバハイ学術研究会日本支部会長角井宏氏のあいさつで提起されたテーマの内の二点に注目したい。一つは、精神性は宇宙万物の原動力であるということである。また、この力は、人間の内に、美徳として現われる。もう一つは、変化の概念を再検討し、変化への抵抗を止めるべきであるということである。この点に関しては、バハオラが「アグダスの書」において、変化という現象は、この世の中及び時間と空間との必要不可欠な属性であると述べておられる。

本論に入る前に、もう一つの指摘をしたい。それは、精神的教育の内容は、比較的、よく知られていることである。精神的、道徳的な行動が何であるかは、誰もが理解していると思われるが、問題は、この精神的な原則に従った適切な教育方法を見つけ、精神性についての知識をうまく伝えることである。しかし、バハイ信教の聖典は、美徳についての知識のみを言っているのではなく、この知識をどう応用すべきかという点についても教えているのである。この点を少し、紹介したい。

一般に行われている教育では、未来を現在の延長として考える傾向がある。しかし、万国正義院のレズワン・メッセージが指摘しているように、バハイのみならず、全世界が必要としているのは、新しい考え方と行動のパラダイム（模範）であり、前、万国正義院のメンバーであるデイヴィッド・ルー博士は、バハイ教育が、「これから創造されるであろう新しいパラダイムである」ことを強調している。従って、精神性を中心として考え、変化という概念に対する抵抗感をとりはらい、従来と違う方法を前提として、新しいパラダイムになりうる教育の在り方を検討したい。

相互依存

昨日のデイスター・スクールについての発表の中に、ある学生の指摘があった。それは、現代の子供は、昔のように家族に貢献しなくなったということである。この傾向は、全社会の動きを反映している。昔は、依存（dependence）の時代で、子供は補助的な役割を果たしていた。今は、独立（independence）がもてはやされるようになり、社会は、個人が古くからの道徳的

価値観から自由になることと、独立した個人の権利に重点を置いている。しかし、これが誤りだとした場合、過去の古い価値観や考え方に戻らなければならないのだろうか？

依存から独立へ転換した社会に、依存の方に返っていくことがいいと主張する人がいる。しかし、私が指摘したいのは、圧迫をもたらす依存と不和をもたらす独立との間に中道はないのかと言うことである。現在、ベストセラーになっている『効率的人間の７つの習慣』の中で、著者スティーヴン・コーヴィーは、今日、人類が緊急に必要としているのは、相互依存(interdependence) であると主張する。そうした統合のアプローチは、私が提案したい方法の基礎になっている。

人間の精神的な性質

教育分野には、人間の精神的な性質を論じる際、基本的に二つの考え方がある。一つは、人間には、社会性、感情、知性及び肉体とともに、精神的な属性が備わっており、精神の発達がこれらの属性と同列に必要であるとする見方である。この考え方の実例として、私が長年勤めているオーストラリアの公立教育機関を取り上げたい。そこでは、精神教育もカリキュラムの本質的なものとして取り入れている。もう一つの見方は、精神性を、人間性の核心であるとみなす考え方である。

前者の見方を取り入れる教育制度では、子供を空っぽの容器のように考え、教育によってその容器が満たされると見ている。更に、子供は、常に間違いをおかすので、常時直されることになる。親、教員、その他の教育者が、子供に、ある精神的な属性を押し付けたり、子供を「評価する言葉」（「良い子」、「悪い子」など）で呼んだりすることも是とされる。家庭や学校では、残念ながら、このことが広く行われている。これらは、大勢の若い者が宗教を受け入れない、親の権威を認めない、教育を拒否するといった現象の原因にもなっている。

さらに、この考え方は、善と悪、光と闇の二元的な考え方と同類である。しかし、バハオラによると、こうした属性は対立しているのではなく、後者は、前者が欠けている状態に過ぎない。つまり、闇は光がない状態だということである。

従って、バハオラは、後者の考え方、つまり精神性こそが人間性の核心であるという見方の正当性を認めているのである。つまり、「人間を、計り知れないほど高価な宝石に富む鉱山と見なせ。」（『落ち穂集』選集その二、５７頁。）そして、その精神性と関わる教育が重要であると指摘する。「教育のみがその宝を放出させ、人類にその利益を享受させることができる」（同上）とし、さらにこう述べておられる。「人間の実質には、神は神の諸々の名に諸々の属性のすべての光輝を集中し、人間の実質をして神自身の鏡となし給うたのである」（『落ち穂集』選集その一、２１頁）。

教育における意義

バハオラは、精神的な教育内容だけではなく、その方法についても教えておられる。バハイ信者達のその理解は、まだまだ未熟ではあるが、いくつかのことが把握されている。

まず、バハオラの原則の中には、独立探究がある。習う者が積極的に勉強するよう命じておられる。「汝が尋ねていた質問の意味を理解するよう努めよ。されば汝は、神の信教に不動であることができるであろう。（『確信の書』１９１頁。）これは、「先生は教える。生徒は習う。逆は絶対ない。」というような伝統的な考え方とは大きくかけ離れている。生徒が質問を

するというのは、本来の姿である。教育制度は、学生が質問をし、得た答えを分析・評価できるように学ぶ側を育成しなければならないのである。

もう一つの伝統的な考え方は、人間の本質は精神であるという考え方と関わっている。それは、苦痛を伴わない勉強は、本当の勉強ではないとする考え方である。アブドル・バハは、勉強は喜びに満ちた過程でなければ、その効果を発揮しないと、上に述べた考え方とは全く逆のことを指摘された。

人間の精神性を認めた場合の教育における変化は、まだまだ数多くあるが、時間の余裕がないので、その中のいくつかを簡単に述べたい。万国正義院のメンバーであるピーター・カーン博士は４年計画の中で、物事の全体と他と切り離された一つの結果よりも、物事のつながりと発展の過程に重点を置くべきであると述べたが、これは、教育についても、言えるであろう。伝統的な人間の見方は、教育を解体に導いた。学問の分野は独立させられ、優先順位が付けられ、言語、科学、数学は、学校や社会において重視されてきた。しかし、最近の研究は、こういった学習の在り方以外に、特定の教科を重要視しない、いくつかの学び方のあることを指摘している。視覚、聴覚、運動の有機的なつながりを生かした美術、音楽、ダンスなどによる、物事の理解も重要である。同様に、人間相互理解（interpersonal intelligence）を生かした協議、人間の内面探究志向を生かした祈りと瞑想も、正当な学び方で、私達の本質を発展させる方法である。

バハオラはまた、教育は試行錯誤の過程であると示しておられる。万国正義院のメンバーであるファーザム・アーハブ博士は、教育の過程を、山を登る時の螺旋状の道に喩えられた。上に進めば進むほど、同じものを見ても、視野が広くなるということである。もちろん、時としては滑って、低い段階に落ちてしまうこともあるが。

最後に、最近オーストラリアで話題になっている「自分を大切にすること」に触れてみたい。『四つの谷』の中で、バハオラはこう述べておられる。「この段階では、自己は拒否されるのではなく、愛されるのである。自分は楽しい存在であり、忌み嫌われるべきではない。」バハイの教えにインスピレーションを得た教育方法、「 Virtues Project 」は、オーストラリアに広がっている。その中心的な考え方は、精神的な原則に則って生きるなら、自分を大切にする考え方は自然な姿なのであるというものである。これも、人間は、精神性を本来持っていて、それを押し付けることは必要でなく、引き出すだけでよい、ということである。

色々な点について簡単に触れただけだが、結論を述べると、「人間の精神性を前提にした、バハオラの教えにもとづいて教育を行えば、その教育は、変化をもたらす新しい考え方を歓迎し、教育の過程に試行錯誤を取り入れる、楽しい、刺激に満ちた教育になるであろう。」ということになる。